課題　嫁と姑

「台所の風景」

人物

円城ナオ（３６）（４５）編集者

円城千代子（６３）（７２）ナオの姑

円城修平（２９）山岳ガイド　ナオの夫

高橋一平（３７）ナオの同僚

長田（４２）ナオの同僚

○円城家　居間

古い一軒家と思われる家の居間。ちゃぶ台で、円城千代子（６３）と向かい合わせて、円城ナオ（３６）と円城修平（２９）が座っている。千代子は平服であるが、ナオと修平はスーツ姿である。

千代子、ポットのお湯がないことに気が付き、立ち上がる。

修平「ええ？かあちゃん：？」

千代子「お湯とりに」

修平「いい、いい。俺取ってくるから」

修平、がばっと立ち上がって、ポットをもって台所にいってしまう。

千代子とナオが２人ぽつんと残される。

ナオはずっと正座である。

千代子「：くずして」

ナオ「え？」

千代子「足くずしてちょうだい」

ナオ「…いえ、あの」
千代子「私がなんだか悪人みたい」
ナオ、足をゆっくり伸ばす。
ナオ「あ、、、、いっつ：」
千代子「あなた、何歳」
ナオ「はい？」
千代子「お歳は何歳なの？」
ナオ「…３６です」
千代子、ため息ともとれない息を
はき、お茶を飲もうとして、お茶が
ないことに気が付く。
ナオ「すいません！こんな年上で」
ナオ、思いっきり頭をさげ、ちゃ
ぶ台に頭をぶつける。
千代子「：子供は作る気ある？」
ナオ「はい？」
千代子「子供。３６じゃあ、すぐ作らなき
ゃ間に合わないでしょ」
そこに、ポットを持った修平が戻
ってきて

修平「勝手に決めんなよ」
ナオ「…」
千代子「あのね、男と違って女は、」
修平「別に認めてもらおうとか思ってないからな」
ナオ「修平」
修平「ここに来たのは、結婚の報告」
千代子「…じゃあ、山、やめなさい」
修平「は？」
千代子「ナオさんを幸せにしたいんなら、やめなさい」
修平「何、急に：」
千代子「お父さんも山がなければ」
修平「そんなのどこだって事故はあるだろ！」
千代子「あんな危ない所：」
修平「なんでそうなるんだよ、かあちゃんは！」
ナオ二人の喧嘩から目をそらし、ふと、台所の方をみる。

鍋が棚にきちんと綺麗に並べられている。
窓からは、初夏の北アルプスの山々が見えている。

○ビルの中にある編集室

アルプスの山々をバックにして、修平（２９）とナオ（３６）が登山服姿で映っている写真がデスクに飾ってある。
その横で、ナオ（４５）がパソコンを見ながら資料のチェック中。
デスクの上には、資料や写真、登山グッズのサンプルなど、山に関するものが置いてある。
高橋一平（３７）がやってきて紙を渡す。

高橋「ナオさんこれ。大丈夫な日、丸つけてください」
ナオ「え？何？」

高橋「忘年会の日程です。ナオさん、毎年用事があるから、早めにと思って」

ナオ、日程表をみる。１２月と１月の週末の予定を確認できるようになっている。

ナオ「これもう来年になって：」

高橋「そのくらい幅ひろげれば大丈夫でしょ？」

ナオ、高橋の顔をしみじみとみる。

高橋「（どきっとするが）決めといてくださいよ。ナオさん」

○居酒屋

高橋とその他、１０人くらいのメンバーで飲み会をしている。

ナオはいない。

高橋の横に座っている、長田（４２）が、高橋にビールをつぎながら

長田「ナオはやめとけよ」

高橋「え？」

長田「死んだ奴には勝てねーからな」
高橋「なにいって：」
長田「冬山でなくなったんだよ、旦那。
今頃だったな」
高橋「…知ってます」
長田「じゃあ」
高橋「（遮って）違いますよ」
長田「：」
高橋「生きてりゃ人は変われるんです」
長田、高橋の真剣な顔をみて：

○駅　ホーム

「松本駅」と書かれた看板。
コートを着たナオがリュックを背負いながら、電車から降りてくる。

○田んぼ道

北アルプスを背に、薄く雪がつもった田んぼ道を歩いているナオ。
ナオの吐く息は白い。

○円城家　外観

古い日本家屋。玄関のところだけ雪かきがしてある。

ナオ、家を見上げて

ナオ「：ただいま」

○円城家　台所（夜）

台所の棚には小さな鍋が数個並んでいるのみ。

鍋は少し埃をかぶっているように見える。

テーブルでは、ナオと千代子がすき焼きを食べている。

千代子「それ取って」

ナオ、近くにあった七味唐辛子を渡す。

ナオ「かけすぎじゃない？」

千代子「カプサイシンは体にいいの。ほら、あんたも」

ナオ、首をふって

ナオ「肉の風味を楽しみたい」
千代子「あんた、いつからそんなグルメに」
ナオ「ずっとだよ」
千代子「ハイハイ」
千代子、唐辛子がかかった肉を美味しそうに食べ始める。
ナオ「ねえ、明日、お墓参りでいい？」
千代子「明日か：」
ナオ「なにかあった？」
千代子「寒いから」
ナオ「それは：しょうがないよ」
千代子「午後から雪降るらしいし」
ナオ「え？私、運転できるかなあ」
千代子「いい、いい。私が運転する」
ナオ「ヤダ。千代ちゃんの運転のほうが怖い」
千代子「失礼な」
ナオ「高齢運転は危ないって」
千代子「ここじゃ運転しなきゃ生活でき

ないの。ホラあんたも肉」

ナオ、すき焼きの肉を取りながら

ナオ「：でもさ、私、運転するよ。明日は」

千代子「ハイハイ」

千代子、立ち上がって冷蔵庫のほうに歩いていく。

ナオ「（小さい声で）：ここの嫁だし」

千代子「（冷蔵庫を開けながら）しめは、うどんでいい？それとも」

ナオ「うどんがいい」

千代子「そうだと思った」

× × ×

２人、鍋のうどんを食べている。

千代子「まったく、なんでこの寒い時期に死んだんだろ。うちの息子」

ナオ「ホントだね」

千代子「春とか秋なら楽なのに」

ナオ「でも、そしたら私、年末いっしょにいないよ」

千代子「何いってんの」
ナオ「え？」
千代子「ここあんたの家でしょ」
ナオ「：：」
千代子「そうだ。明後日、坂本さんが、お餅くれるって」
ナオ「え？やった」
千代子「アンコはあるけど、きな粉あったっけ：」
ナオ「アンコって：」
千代子「何？粒あんだけど」
ナオ「そっか：そうだよね」
千代子「何？」
ナオ「何でもない」
千代子「変な子」
ナオ、立ち上がり、洗い物を始めようとする。
ナオ「今日は私がするから、座ってて。
（千代子に聞こえない声で）：：お義母さん」
了